

# 土浦の貝塚



土浦市立博物館長  
茨城大学名誉教授

茂木雅博



土浦市民の皆様、新年おめでとうございます。私は館長として無事一年を終えることができました。これも皆様のご協力とご支援の賜物と感謝いたしております。昨年度本紙でお約束した館長講座も毎回楽しい時間を過ごすことが出来ました。心より御礼申し上げます。今年も第3日曜日を中心を開講させていただきますので、どうぞお気軽に博物館まで御足労ください。博物館は心の豊かさを育てる施設です。館員一同、日々研鑽して皆様のお越しをお待ちしておりますので、土浦市の歴史について疑問に思うことがございましたら、ぜひお出かけください。私たちは、喜んで質問に対応させていただきます。

さて、今回は昨年の館長講座で話題となつた「貝塚」について取り上げてみたいと思います。現在、市内には10か所の大小貝塚が現存しています。これらは縄文時代前期から晩期にかけて形成され、特に上高津貝塚は土浦を代表する巨大貝塚です。昭和52年には国史跡指定を受け、茨城県は云うに及ばず日本を代表する遺跡として保護されています。

いう一節を設けて、明治39年10月23日に二つの貝塚を発掘した記録を残しています。そして、彼は上高津貝塚の規模の大きさから、個人消費のためのものではなく「干貝工場跡」と考え、縄文時代に物々交換が行われていたという学説を発表しています。この考えは近年の研究で常識とされる様になりますが、その先見性は実に見事であり、上高津貝塚の学問的価値を高めるうえで大変重要な考え方でした。

上高津貝塚の重要性の第2点は、製塩施設の発見になります。土浦市は昭和61年度に国史跡指定地約4・4haの全域買収を行い、平成3年度から「ふるさと歴史の広場」としての史跡整備を実施して、現在のような素晴らしい

貝塚遺跡史跡公園が完成いたしました。この整備事業にあたり、史実にあつた資料蒐集のための学術調査が、平成2年7月から平成3年8月にかけて慶應大学考古学研究室の協力で行われ、貝塚群の南側に製塩遺構が発見され、縄文製塩の実態が明らかにされたのです。

日本における製塩関連遺跡は、縄文時代後期に霞ヶ浦沿岸で確認されているのが最古です。その最初は稻敷市広畠貝塚であり、次いで同市前浦貝塚など数か所で確認されています。広畠貝塚は霞ヶ浦の南西の入江に面する地点であり、大量の表面の剥離した薄い土器片が採集されています。広畠貝塚を発掘調査した当時の岡山大学の近藤

（明治42年刊）の中で「上高津と小松」と書かれています。

義郎先生は、この土器片に附着した白色物質を化学分析して、海水が煎熬過程で発生する炭酸マグネシウムである事を突き止めたのです。上高津貝塚で確認された日本における縄文製塩は、霞ヶ浦西岸一帯で行われていたことが考古学的に証明されたのです。常陸国風土記の時代にも霞ヶ浦の周辺で藻塩焼きによる製塩記事が見られますが、未だその実態は証明されていません。この時代になると、製塩は瀬戸内海沿岸に生産の拠点を移して、初步的な塩田法による鹹水溜によって大量生産が可能になります。しかし、常陸国風土記に記載された藻塩焼きによる鹹水採取では、おそらく大量生産は不可能と思われます。考古学的に検討すると、霞ヶ浦沿岸で開始された土器製塩は、やがて東北の松島湾沿岸に移り、弥生時代になると瀬戸内海沿岸に多くの遺跡を残すようになります。こうして考えてみると、我が霞ヶ浦沿岸地域は原始時代から素晴らしい歴史を刻んでいたことが証明され、土浦はそんな場所に位置しているのです。

#### 参考文献

- 江見水蔭『探検実記 地中の秘密』博文館（明治42年）
- 土浦市教育委員会『国指定史跡 上高津貝塚 A地点・史跡整備事業に伴う発掘調査報告書』（1994年）、同『国指定史跡 上高津貝塚 E地点・史跡整備事業に伴う発掘調査報告書』（2000年）



上空から見た上高津貝塚ふるさと歴史の広場



上高津貝塚出土の製塩土器



製塩を証明した広畠貝塚（稻敷市）